

2007 年度 防災教育 チャレンジプラン 最 終 報 告 書

記入日 2008 年 1 月 20 日

1. 概要

実践団体名	国際防災教育支援団体 SIDE	
連絡先	電話番号	090-9862-8540 (代表携帯)
プランタイトル	持続可能な防災教育 in Nepal	
目的	ネパールで学生・先生に防災知識を伝える。また先生自身が防災教育を実施できるようにする。防災教育の、日本とネパールとの相違点や共通点を考察する。	
プランの概略	独自に制作した防災絵本や震動台実験を使い、現地の学生に授業を行う。先生にも参加してもらい、教材の使い方を覚え先生も防災教育ができるようにする。またこれら経験を日本にも還元するため、小・中学校を訪れ伝える。	
プランの対象	ネパールの小・中学生約 200 人 教師約 10 名 日本の小・中学生約 650 人	
実施日時	ネパール国内 2007 年 8 月 21 日、8 月 24 日、8 月 27 日 ネパールでの経験を日本で還元 2007 年 12 月 18 日、2008 年 1 月 15 日	
実施場所	ネパール (Eloquence contest、Shree Krishna Secondary School、Bal Bikash Secondary School、Shree Mahendra Adarsha secondary school) 日本 (田辺市立新庄中学校、神戸大学発達科学部附属明石小学校)	
連携した団体	連携団体の有無	有
	連携した団体	ネパールの地震防災 NGO である NSET-Nepal (National Society for Earthquake Technology-Nepal)
	連携したきっかけ・理由	2003 年、2004 年、2005 年に兵庫県立舞子高校の国際交流事業ネパール訪問のカウンターパートナーとして連携を開始。その後もネットワークを保ち、今回連携に至った。
	連携団体へのアプローチ方法	E メール
	連携団体との打ち合わせ回数	E メール上で 5 回程度、その後、現地で必要回数打ち合わせ
	連携団体との役割分担	現地滞在中のコーディネート、授業の際の通訳等。

2007 年度 防災教育 チャレンジプラン 最 終 報 告 書

2. プランの立案過程

プラン立案 メンバーの 人数と役割	団体内の スタッフ総人数	6名
	外部スタッフの 総人数	1名（日本滞在中のネパール人）
	主なメンバーの 役職・役割	責任者：中野 絵本制作：河田・岸本・八田原 震動台実験制作：横峯 会計：兼田
プラン立案 に要した 日数・時間	立案期間	2006年11月～2007年1月
	立案時間	12時間
	上記のうち 打ち合わせ時間	ミーティング 3時間×4回
プラン立案 で注意を 払った点	<p>ネパールの文化的背景や防災の現状に合った教材を作ることに大きな注意を払った。現地の子どもたち、先生方に使ってもらえる＝どれだけネパールの状況や文化に即したものかによると考え、文化的背景や防災の現状について知るために、今までネパールを訪れたメンバーが状況について共有し、日本に滞在しているネパール人からも話を聞き、このプランの大枠を決めていった。</p>	
プラン立案 で苦労した点	<p>ネパールで私たちの滞在期間中のみの防災教育だけではなく、私たちがネパールを去った後も続く防災教育を実現するためにはどうしたらよいのか、この点が最も頭を悩ませた点である。その1つの方法として、現地の子どもが読むことができ、先生が教材として使うことのできる絵本があればよいのではという結論に至った。また、最近ではネパールでも小規模の地震が発生しているが、私たちが防災教育を行う予定をしていた地域に地震を体験した人々はいない。防災教育が行われておらず、地震そのものを知らない人が多い中で、どのように地震と防災の必要性を伝えていけばよいのか、団体内で議論を重ねた。その結果、話だけではなく現地の人々が想像しやすくなるよう視覚化して伝えていくことが大切だという結論に至った。震動台実験を使い、現地の人々がもしそこに住んでいればどうなるかを簡単に想像できるようにし、メカニズム絵本など動く教材を使い理解しやすくなるようにした。</p>	

2007 年度 防災教育 チャレンジプラン 最 終 報 告 書

3. 実践にあたっての準備

準備に関わった方と人数・役割	団体内のスタッフ総人数	6名
	外部スタッフの総人数	4名（英会話学校講師、日本滞在のネパール人）
	主なメンバーの役職・役割	責任者：中野 絵本制作：河田・岸本・八田原 震動台実験制作：横峯 会計：兼田 英語チェック：英会話学校講師 ネパール語翻訳：Mr.Jimo
準備に要した日数・時間	準備期間	2007年2月～7月
	準備総時間	50時間＋各自の担当パート
	上記の打ち合わせ回数	15回
教育関係への働きかけ	働きかけた教育関係者・機関名	三重県教育委員会（諏訪委員からの紹介）
	どのように働きかけたか	Eメール
	結果	今回、防災教育実施には至らなかったものの、三重県内の小学校とネットワークを築くことができた。
地域への働きかけ	働きかけた地域の人・機関名	
	どのように働きかけたか	
	結果	
保護者・PTAへの働きかけ	働きかけた保護者・PTA組織名	
	どのように働きかけたか	
	結果	

2007 年度 防災教育 チャレンジプラン 最 終 報 告 書

機材・教材の 準備方法	用意した機材・教材	①防災教育絵本「BOUSAI」②震動台実験 ③メカニズム絵本
	入手先・入手方法	ネパール用に独自に制作
	機材教材の選定理由	ネパールに合った教材が存在しなかったため独自に制作した。
参加者の募集	募集方法	ネパールにおいてはSIDEが防災教育の目的と対象を伝え、NSET-Nepal が学校の選定を行った。新庄中学校、明石小学校ともに、全学年を対象にしたため募集は行っていない。
	募集期間	
	参加予想人数	
	実際の参加人数	ネパールの小・中学生約 200 人 教師約 10 名 新庄中 191 名、明石小 480 名
	募集方法の成功点	
	募集方法の失敗点	
準備で 苦勞した点 工夫した点	<p>プラン立案の段階でネパールでの地震発生のメカニズムや防災現状、また文化的背景などについて学んできたが、それを実際の教材にどのように反映していくのが最も苦勞した点でもあり工夫した点でもある。</p> <p>①防災教育絵本「BOUSAI」</p> <p>阪神・淡路大震災の経験を伝える「くるみちゃんの話」の中では、暗い色と明るい色を使い分けながら震災当時のことを表現し、必ずしも辛いことだけではなく助け合いなどの素晴らしさも同時に伝えるものとなっており、また、登場人物を絵ではなく粘土で作成し表現したことで、背景とのコントラストをつけ登場人物の感情を中心に読み進められるように工夫した。「三人の子ども」の話では、3 匹のこぶたを参考にし、災害前に備えた子どもと備えなかった子どもとを比較をすることによって、備えの大切さを伝えている。ここでは、ネパールによく見られる風景を使い親しみやすくなるように配慮している。また、ネパールの地震と地滑りのメカニズムの解説、具体的な備えの方法を学ぶことができる「さあ、やってみよう」のパートなど、この本 1 冊で必要最低限の防災の知識を得られるような内容になるよう、本当に必要な知識のみを取り入れることが苦勞した点である。また、心のケアの知識を伝えるストーリーも取り入れ、ここには災害後の心のケアのみならず、日常的に使える知識も含まれている。</p>	

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

②震動台実験

ネパールの家が地震に対してどれほど脆弱なのかを、模型を使って示すことにより、わかりやすく伝えられるよう工夫した。耐震化した模型と耐震化していない模型を同時に揺らしてどちらが壊れるかを見る簡単な方法であり、「もし自分がそこにいるとどうなるか」など想像できる。

③メカニズム絵本

地震と地滑りのメカニズムをわかりやすく伝えるために、プレートや山などを擬人化する方法をとった。また、画用紙を重ね合わせてプレートを動かせるなどの工夫をし、視覚的に地震のメカニズムを理解できるようにした。

2007 年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

4. タイムスケジュール

	プラン立案	実践にあたっての準備	実践
2007年 5月		防災教育絵本「BOUSAI」の具体的なストーリーを検討	
2007年 6月		「BOUSAI」を絵に仕上げていく作業	
2007年 7月		震動台実験の制作 「BOUSAI」最終チェック	
2007年 8月		ネパールでの防災教育の最終チェック	8月18日から31日にかけてネパールを訪問。防災教育活動を行う。
2007年 9月	ネパールでの実践を日本で活かす方法を検討。		
2007年 10月		日本国内で防災教育を実施するための交渉をスタート。	
2007年 11月		ネパールで NSET から紹介されたネパールの震災体験を日本語にし、絵本形式へ。	
2007年 12月			田辺市立新庄中学校にて、ネパールでの防災教育活動について伝え、阪神・淡路大震災の体験を伝えた。
2008年 1月			神戸大学発達科学部附属明石小学校で、ネパールの防災教育について伝え、阪神・淡路大震災の体験について伝えた。

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

5. 実践の詳細【A. 海外での防災教育】 (メインとなる活動を45分1コマとして記入してください)

タイトル	阪神・淡路大震災の体験	発災前の備え	地震・地滑りのメカニズム	災害時対応と心のケア
実施日	8月24日、27日	8月24日、27日	8月24日、27日	8月21日、24日、27日
所要時間	30分	30分	30分	30分
達成目標	震災の体験を伝え、地震の恐ろしさと震災から生まれた助け合いを学ぶ。	発災前にすべきことは何かを、生徒自らが考えて実行するための知識を学ぶ。	地震や地滑りがなぜ起こるのかを学び、備えや防災への学びの動機とする。	地震発生時と地震後のストレスへの対処法を学ぶ。
生成物	なし	なし	なし	なし
進め方 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・震災の概要 ・当時の体験を話す ・ネパールでも地震のリスクがあることを伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・震動台実験と解説 ・ネパールの家を書いた模造紙を使い、地震の際に危ない場所を生徒と考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・地震のメカニズムについて説明 ・地滑りのメカニズムとその兆候について説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・地震発生時にどう行動をとるか生徒と対話しながら考える ・心のケアの知識を説明
ツール (特別に用意したもの)	<ul style="list-style-type: none"> ・震災当時の写真 ・防災教育絵本「BOUSAI」 	<ul style="list-style-type: none"> ・震動台実験 ・防災教育絵本「BOUSAI」 ・ネパールの家の中と周辺を書いた模造紙 	<ul style="list-style-type: none"> ・メカニズム絵本 ・防災教育絵本「BOUSAI」 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災教育絵本「BOUSAI」
場所	Bal Bikash Secondary School Shree Krishna Secondary School	Bal Bikash Secondary School Shree Krishna Secondary School	Bal Bikash Secondary School Shree Krishna Secondary School	Eloquence contest, Bal Bikash Secondary School, Shree Krishna Secondary School

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

5. 実践の詳細【C. 総合的な学習時間】（メインとなる活動を45分1コマとして記入してください）

タイトル	阪神・淡路大震災の体験	ネパールでの活動	バイチャ物語	
実施日	12月18日	12月18日	12月18日	
所要時間	15分	15分	15分	
達成目標	震災の体験を伝え、地震の恐ろしさと震災から生まれた助け合いを学ぶ。	ネパールでの防災現状と私たちの活動を伝え、防災への意識を高める。	ネパールで伝わっている地震の話を知り、恐ろしさや支えあい大切さを学ぶ。	
生成物	なし	なし	なし	
進め方 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・震災当時の映像 ・当時の体験を話す 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールについて知る(文化・人・土地など) ・私たちの活動を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・バイチャ物語を絵本形式にし、スライドを使い読み聞かせをする。 	
ツール (特別に用意したもの)	<ul style="list-style-type: none"> ・幸せ運ぼう (DVD: 読売テレビ放送制作) 	<ul style="list-style-type: none"> ・スライド (現地で撮影した写真などを使用) 	<ul style="list-style-type: none"> ・スライド 	
場所	田辺市立新庄中学校	田辺市立新庄中学校	田辺市立新庄中学校	

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

5. 実践の詳細【C. 総合的な学習時間】（メインとなる活動を45分1コマとして記入してください）

タイトル	阪神・淡路大震災の体験	ネパールでの活動		
実施日	1月15日	1月15日		
所要時間	15分	15分		
達成目標	震災の体験を伝え、地震の恐ろしさと震災から生まれた助け合いを学ぶ。	ネパールでの防災現状と私たちの活動を伝え、防災を学ぶきっかけとする。		
生成物	なし	なし		
進め方 (箇条書き)	・当時の体験を話す	・ネパールについて知る (文化・人・土地など) ・私たちの活動を伝える		
ツール (特別に用意したもの)	・スライド (BOUSAI で使 用した画像)	・スライド (現地で撮影し た写真などを利用)		
場所	神戸大学発達科学部附属 明石小学校	神戸大学発達科学部附属 明石小学校		

**2007年度防災教育チャレンジプラン
最終報告書**

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

6. 実施後

参加者へのアンケート結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールでは 2008 年に現地を訪れ「BOUSAI」の使われ方などを調査する。 ・神戸大学発達科学部附属明石小学校 4 年生の作文から、「大きなじしんの時、自分ができることをしてあげたい」、「ほんとうにせんそうがあったみたいなかんじでじしんがあったからびっくりした」、「水をかっておく。ひなんじよをかくにんしておく」「ネパールをたすけてあげたい」との感想が見られた。 	
成果として得たこと	<p>防災教育担当の先生は、『「あっ、地震って本当にそうだったんだ。』と心にストンと落ちる話だったようです。年齢が近いということもあるのでしょうか」と話していた。「ほんとうにせんそうがあったみたいなかんじでじしんがあったからびっくりした」という感想からも若者が語り継ぐことでより近い距離で伝え、ネパールでの体験談は助け合いの大切さも伝えていることがわかる。</p>	
成果物	<p>防災教育絵本「BOUSAI」、震動台実験、メカニズム絵本、バイチャ物語、防災教育絵本「BOUSAI」の指導書（中間報告会でのアドバイスをを受けて制作を開始、現在制作中）</p>	
広報方法	広報した先	新聞社
	広報の方法	Eメール
	取材に来たマスコミ	神戸新聞社（自由記述欄参照）・紀伊民報・朝日新聞社
	広報された内容	ネパール、新庄中学校、明石小学校それぞれでの取り組み
	成功点	神戸新聞夕刊のトップに、神戸大学発達科学部明石小学校で防災教育を実施したこと、「人と防災未来センターと連携した若者の震災語り部活動」への可能性を書いていただきました。
	失敗点	

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

<p>全体の感想と 反省・課題</p>	<p>防災教育絵本「BOUSAI」について、できるだけ簡単な内容にしようと文章を短くしたが、短くしすぎたせいでメカニズムを説明しているパートなど逆にわかりにくくなっている部分があった。また5章それぞれの関連性が明確になっておらず、ともすればそれぞれが独立してしまっている。関連性を明確にするため今後改善していきたい。また、ネパールの地域名を入れることで、より親しみを持てる内容にすべきだったと感じている。</p>	
<p>今後の予定</p>	<p>来年度以降の 取り組み方</p>	<p>防災教育絵本「BOUSAI」を改善し第2版を制作、それに指導書をつけてネパールの先生を対象にした防災教育を行う。防災教育の知識を得た先生が、この「BOUSAI」と指導書を使い周囲の先生に伝えていくことで、持続可能性の充実につなげたい。また、日本国内においては、バイチャ物語を広げていく。</p>
	<p>ぜひ実施して みたい取り組み</p>	<p>アジアは全体的にレンガ造りの家が多く、宗教の違いを除けば一般市民の取るべき防災対策について比較的似ていると感じている。この点を利用して、アジア対応型の汎用性の高い防災教育絵本を制作してみたい。</p>

2007年度防災教育チャレンジプラン 最終報告書

自由記述

【ネパールと日本の防災教育の違いについて】

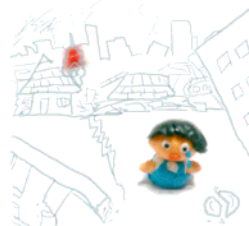
日本では、最近各地で地震が起こっており、小学校や中学校を訪れても地震というのはどういったものか、大体のことについては理解しているように感じられた。ネパールでも 1988 年に大地震が起こっているが、私たちの訪れた学校の多くの生徒が地震について全く知識を持っていなかった。備えの授業をする前に、「地震が来る前に何をしておくべきか考えたことがある？」と尋ねてみるものの、全員から「そんなの考えたことがなかった」との答えだった。その点で、震災体験や震動台実験は、地震がどういったものなのかを具体的に伝えるのに役立つ、ネパールでは日本に比べてより視覚的に伝えていくことの必要性を感じた。

また、ネパールでは学校を拠点に防災を広げていくことがより効果的であると考える。ネパールでは現在の日本よりも家族を重んじる傾向が強い。農村地域では親の住む家の周辺に子どもが家を建てていることが多く、都市部においても親の家の上に増築して自立した子どもが暮らしていることが多々ある。防災を学んだ子どもたちが、身近にいる多くの家族に伝えることができる環境である。また、地域コミュニティーの中心には学校があり、行事の際には多くの地域住民が集まるなど、ネパールにおいて学校が地域社会に対し与えられる影響は大きいと考える。



神戸新聞記事

A girl, named Kurumi, was in Kobe when the great earthquake occurred. Her family was safe, but her house was heavily damaged. She lost most of her favorite books and toys. Since her school got severely damaged as well, she could not go to school.



KURUMI LE TES GHATANA KOBE KO BHOGE RAHEKO KARAN RAHE USUKO CHARBAR RA STATIONERES PASAI RA KHELLA CHI SABAI APHU PANI LAMG SAMAYA SAM MA BIDALAYA(SCHOOL) JANA

防災教育絵本「BOUSAI」

**2007年度防災教育チャレンジプラン
最終報告書**